

日本語学会 2021 年度秋季大会シンポジウム

語用論と日本語研究

パネリスト 滝浦真人（放送大学）
パネリスト 加藤重広（北海道大学）
パネリスト 森 勇太（関西大学）
指定討論者 吉田永弘（国学院大学）
企画・司会 青木博史（九州大学）

趣旨

近年の言語学界において、最も勢いのある分野の一つが「語用論」であると思う。ここ数年を見渡してみても、入門書や概説書、論文集が次々に出版され、また、日本語用論学会の年次大会も活況を呈している。

語用論とは、「コンテキスト（文脈）を考慮に入れて言語使用について研究する」ものであるから、特徴の一つに、その射程の広さが挙げられる。「語用論」と聞けば、会話の協調原理、推意・前提、発話行為、ポライトネスなどの用語を思い浮かべる方も多いかもしれないが、現在は、社会語用論や歴史語用論、対照語用論、統語語用論などの様々な領域へと広がっている。こうしたネーミングからも分かるように、「語用論」は学問の“分野”というよりは“方法論”としての広がりを見せていると言える。社会言語学や歴史言語学、対照言語学といった分野で扱われてきた言語現象を、語用論的観点から記述する、あるいは語用論的現象として捉え直す、といった方法である。

こうした新しい潮流としての語用論研究は、必ずしも日本語研究と密接に結びついて進められてきたわけではなかった。ダイクシスや敬語など、特定の言語現象に限られていたように思う。しかしそれは、これまでの日本語研究において語用論研究が行われてこなかったということを、必ずしも意味するものではない。たとえば、話しことばにおける過去の言語がどのようなもので、それがいつ、どのようにして、なぜ変化していくかを探る「歴史語用論」の目的および方法は、従来の「国語史」が目指すところと何ら変わることはない。

本シンポジウムでは、「語用論」というキーワードを通して、様々な分野・立場の研究者と交流を図り、さらなる日本語研究の発展につなげることを目指す。

構成

- 14:00～14:10 講師紹介・趣旨説明（青木）
14:10～14:40 発題① 統語語用論の立場から：加藤
14:40～15:10 発題② 歴史語用論の立場から：森
15:10～15:40 発題③ 社会語用論の立場から：滝浦
15:40～16:10 休憩
16:10～16:25 指定討論者（吉田）との質疑応答
16:25～16:45 参加者からの質問への回答
16:45～17:00 全体討論・総括

まずは、「語用論」を意識的に研究してきた3人のパネリストにご登壇いただき、「統語語用論」、「歴史語用論」、「社会語用論」、といったそれぞれの立場から成果を披瀝していただく。もちろん、こうした枠組みは便宜上のものにすぎない。これらの発題の後、「語用論」をそれほど意識して研究してきたわけではない立場の指定討論者からコメントを出し、これに応答する形で討論を行う。この後、参加者との質疑応答を行い、司会も含めて全体討論を行う。

文献

- 高田博行，椎名美智，小野寺典子編（2011）『歴史語用論入門』大修館書店
金水敏，高田博行，椎名美智編（2014）『歴史語用論の世界』ひつじ書房
加藤重広，滝浦真人編（2015，2017，2020）『日本語語用論フォーラム 1，2，3』ひつじ書房
加藤重広，滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房
高田博行，小野寺典子，青木博史編（2018）『歴史語用論の方法』ひつじ書房
山岡政紀，牧原功，小野正樹（2018）『新版 日本語語用論入門』明治書院
田中廣明ほか編（2019，2020，2021）『動词的語用論の構築へ向けて 1，2，3』開拓社
加藤重広，澤田淳編（2020）『はじめての語用論』研究社
ジョナサン・カルペパー，マイケル・ホー著，椎名美智監訳，加藤重広，滝浦真人，東泉裕子訳（2020）『新しい語用論の世界』研究社
ジェフリー・リーチ著，田中典子監訳（2020）『ポライトネスの語用論』研究社

（企画担当：青木博史・吉田永弘）

文法研究と語用論の接続：統語語用論のいくつかの例から

加藤重広（北海道大学）

「午後 8 時を過ぎたら飲食店で食事できない」というメッセージは「午後 8 時を過ぎていなければ飲食店で食事できる」と理解されることが多い(→誘導推論, Geis & Zicky.1971)が、これは論理的な推論ではない。「お菓子が食べたいなら、戸棚にあるよ」といったビスケット条件文(Austin.1956)も論理的ではないが、「推意」も含めて解釈には一定の粗略性(加藤.2020)があるとも考えられる。これらは文から逸脱しようとする推論だが、文と文をまたぐ推論や、語から生じるものなど、形式単位との関係は多様である。

1. 語用論とは何か

1.1 その始まり

語用論(pragmatics)という用語は哲学者 Charles Morris により記号学の一分野として提案された (Morris.1938, 1955)。そこでは、記号と記号の関係を扱う領域(syntactic dimension of semiosis; Dsyn)としての統語論 (syntactics)と記号と対象の関係を扱う領域 (semantic dimension of semiosis; Dsem)としての意味論(semantic)とともに、記号と解釈者の関係を扱う領域(pragmatic dimension of semiosis; Dp)としての pragmatics が設定されている。Carnap は、pragmatics は「記号と発話者(speaker)の関係」を扱うとした (Carnap.1942) が、両者には解釈者中心(interpreter-centered)か発話者中心(utterer-centered)かという違いが見られる。

その後 1950 年代から 60 年代にかけて Austin や Grice の成果が知られはじめ、1970 年前後に言語学的な語用論へとシフトしていく。1980 年代には言語学的な語用論に重心が移行し、ポライトネス理論や関連性理論(Relevance Theory; RT)も現れる。その後の 30 年ほどで細分化・専門化が進み、現在に至る。

表 1：意味論と語用論の差(加藤 2009b:542 を簡略化)

意味論	相違点	語用論
意味	分析対象	使用
あり	慣習性	なし
依存	真理条件	依存せず
非依存	文脈	依存
字義通り	解釈	字義通りでない
文	研究単位	発話
規則	機構	原理
言語能力	現れ方	言語運用
タイプ	抽象度	トークン
内容	研究対象	作用
言語的意味	意味種	話者による意味
言っていること	動作性	推意していること
言語的	符号化	非言語的
あり	構成性	なし
依存せず	意図	依存

1.2 定義と考え方

語用論についての記述は、「記号と解釈者/発話者の関係」を扱うとするモリスやカルナップのほか、「言語使用の科学」(the science of language use), 「言語行為とそれが遂行される文脈の研究」(the study of linguistic acts and the contexts in which they are performed)(Stalnaker.1972), 「真理条件で説明できない発話の意味」(those aspects of the meaning of utterances which cannot be accounted for by straightforward reference to the truth

conditions of the sentences uttered)(Gazdar.1979)を扱うとするものなどがある。

語用論は英米では言語学の下位領域と見なされることが多いが、欧州では研究の方法論と見なされることが多い（日本は前者に近い）。前者においては、意味論と語用論の違いが重要視され、それが

表 2：帰納的文脈と演繹的文脈(加藤.2020:242)

考え方	時間軸	文脈想定	文脈の変異	視点	特徴
帰納的文脈	遡及的	最小限	蓄積的	俯瞰的	効率的
演繹的文脈	線条的	最大限	消去と蓄積	個人的	網羅的

語用論の定義を形成することもある。Langacker (2008)では、意味論と語用論の関係について、(a)完全分離、(b)語用論は不要、(c)融合（区分不可）、(d)段階的移行、といった見方を示している。両者の違いをまとめると、表 1 のようになる (Lyons.1987, Levinson.1983, Bach.1999, Nemo.1999, Szabó.2005, Huang.2006, Ariel.2010)。

表 3：文脈の種別（加藤.2009a, 2011, 2017b などから再構成）

文脈種別	所在	特性	共有度
形式文脈	談話記憶	発話形式の累積的記録	義務的
状況文脈		物理的環境から抽出	状況共有時は高い
知識文脈		知識文脈で活性化して複製	高くない
二次文脈		上記を総合・計算	低い

総じて、語用論の本質は文脈の関与によって説明されることが多いことから、ここでは語用論を「文脈の科学」と位置づける。文脈

は、区分や定義を措かない研究が多いが、事前に定義すべきだとする演繹的文脈の方法論では、話者や聴者の視点から捉える（表 2, 3）。多くの場合、演繹的文脈も帰納的文脈も当該の発話が文脈の中に位置づけられると考える。しかし、加藤(2017b, 2020)では、発話が文脈に関わる情報を内在させ、文脈を生み出すことがある（＝文脈逆成）としている。

1.3 日本語の語用論

かつて研究対象としての日本語は書きことばが主であって、談話文法の登場以降、徐々に話しことばに重心が移った。その重要性は方言学や日本語教育では理解されていたが、話しことばの研究は寺村文法とともに一気に広がったと見てよいと思う。これは、語用論が認知されるようになった時期とも重なる。話しことばを研究すれば語用論になるわけではないが、そういうイメージが拭い去りがたいのも、こういった事情があるからだろう。

日本に限らないが、語用論はあまり体系的に理解されていない面がある。言語行為 (speech act) は、本来グライス系 (Gricean) 語用論とは別系統だが、区別せずに議論されることも多い。Bach(2006)が論じているように推意 (implicature) には誤解が多く、含意 (entailment) や前提 (presupposition) など論理と文法の接触領域ではいまだ訳語の混乱も多い。ポライトネスは本来グライス系だったが、その関係性も触れられることは少なく、言語行為論も Austin(1962)や Searle(1969)で概ね止まっていて、知見の更新がないことが多い。

語用論が文脈の科学なら、一定の条件を満たす対話や会話は語用論的な研究対象になるはずである。しかし、文法論の多くでは、分析概念や用語に独自性があり、語用論の基礎概念や用語と異なる点が多いため、ふれあわないのだと思われる。加藤(2016)は「統語語用論」という領域を提案しているが、これまでの談話文法や日本語記述文法の成果を文法と語用論 (Ariel.2008 など) との境界領域で再構築することによって、グローバルな語用論研究との連絡を確立することを目指すものである。

2. 統語語用論のトピック

文法規則を立てる場合は、規則が不完全であると最初から考えることは少ないだろう。しかし、語用論では推意(implicature)を軸に、解釈は必ず成立するわけではなく、取り消されたり変更されたりすることから考える。

(1) A「明日映画を見に行かないか」 B「明後日国語学の試験があるんだ」

これはよく引かれる例だが、(1)Bは「明日映画を見に行けない／見に行くことは難しい」という推意を引き出すことで断

り解釈できる。しかし、この推意は取り消すことが可能で、

「試験があるんだけど、映画を見に行く」可能性もある。このように推意は、発話内容から引き出す別の命題であって、かつ失効可能(取消可能)でなければならない。これは、白か黒かを明確にするような厳密な捉え方

表4：推意の特質（⑤⑥はレビンソンによる追加）

①失効可能性(取消可能性) ...前提の付加により推論を無効にできる。
②非分離可能性...コード化された内容が同じ表現であれば同じ推意を伝える。
③計算可能性...合理性のある会話がなされることに伴う諸前提からの推論には相応の透明性がある。
④非慣習性...推論にはコード化されていないところがあるが、コード化された内容には依存する。
⑤強化可能性...コード化された内容を繰り返して言うよりも少ない冗長感で推移される内容を明白に追加できることが多い。
⑥普遍性...推論は合理的な考察から得られ、強い普遍的傾向が期待できる。会話推意には合理的動機があり、恣意的ではない。

ではなく、普通なら選択されるであろう、可能性の高い解釈を選び取るようなものである。

推意は慣習的推意と会話的推意に分けられ、「推意」というときは後者を意味することが多い。後者は一般会話推意(GCI)と特殊会話推意(PCI)に分けられる。推意は文脈を使って引き出すが、中でも重要なのは知識文脈（その源泉となる知識記憶では世界知識(world knowledge)）である。世界知識は膨大な量の個人的情報群であり、共有されているものもあるが、細部も含めると、個人ごとに異なる。

2.1 日本語の関係節構造の成立

日本語の関係節構造では、寺村(1993)にいう「外の関係」が知られている。(2)は加藤(2003, 2010)で随伴物と呼ぶタイプの外の関係だが、同じ構造でも(3)は成立しにくい。従来の文法論では直観で文法性を判断してきたが、文脈を踏まえて語用論的に考える場合どういう文脈なら成立するかあるいは成立しないか（受容度）を判断することになる。これも「サンマを買っている」ときに特有の「におい」や「音」は普通なら生じないと考えるのである。

(2) サンマを焼いている {におい / 音 / 煙}

(3) #サンマを買っている {におい / 音 / 煙}

(4) A社の副社長が昨夜料亭で食事をした政治家

(5) B先輩が今朝学食で定食を食べた後輩

構造上はほぼ平行性がある(4)(5)で(5)の受容度が低いとすれば、外の関係の成立は統語的にのみ支配されるものではなく、文脈、特に世界知識の関与が大きいと考えるべきだろう。(4)(5)は連体修飾節内に「連れ」であることを明示する「一緒に・ともに」といった副

詞句を置けば問題なく成立する。これは必ず成立するわけではないという点で推意に似ているが、推意とは異なる。むしろ(4)(5)はいずれも内容表示としては不足があり、それを聞き手が世界知識を使って補って意味解釈を成立させているとみることができ、その不足の差分の大きさが受容度あるいは不自然さを左右していると考えられる。これは、(2)(3)の関係にも当てはまる。世界知識が個人的なものである以上、受容度にばらつきが出るのは当然である。統語語用論は、個々人の差異を想定に入れるので、分析は単純化しにくくなる。

2.2 構文推意と助動詞のテンス

助詞や助動詞も、特定の条件下で「推意」を持つことがある。「はずだった」は先行する連体修飾節について「(当然そうなると見込んでいたが) 見込み通りにならなかった」の解釈を強く引き出すが、これは取り消すことも不可能ではない。しかし、強い推意なので明らかに取り消す情報が追加されない限りは成立する。(加藤.2017a はこの種の推意を構文推意と呼び、他に語彙推意とテキスト推意を区分している。)

- (6) 太郎は改札の前で待っているはずだった。{a.しかし、1時間待っても太郎は来なかった。 / b. いつも時間厳守の太郎はやはり時間通りに来ていた。}
- (7) 「救えるはずだった命」にしないために。

2.3 二つのタイプの数量詞文

日本語の連体数量詞と連用数量詞は意味差が感じ取りにくいこともあって、遊離現象とする考えもあるが、加藤(2003)では意味的な差があることから数量詞遊離を想定しないとされている。(8)(9)はいずれも適格文である。数量詞遊離を想定する場合、連体数量詞文を基底あるいは無標とし、遊離して連用数量詞文が生成されることが多い。しかし、日本語の運用では(8)のほうが普通で、運用上無標なのは(8)の連用数量詞文である。

- (8) A君は消しゴムを2つ買った。
(9) A君は2つの消しゴムを買った。
(10) 「鉛筆を6本とノートを2冊ください」
(11) 「6本の鉛筆と2冊のノートをください」
(12) 私はテーブルの上にあった6個のパンを食べた。
(13) 私はテーブルの上にあった6個のパンを1つだけ食べた。

文具店で買い物をする場合(10)のように言っても違和感はないが、(11)は文法的ではあっても運用上不自然である。加藤(2003, 2006)では、以下のように両者の違いを記述している(本稿でまとめなおしたもの)。

- (14) 連体数量詞文は、数量詞が表す存在量を既定的単位として認識していることを事前条件として使用される。
(15) 連用数量詞文は、数量詞が表す存在量を特定の既定的単位としての認識を事前条件として使用されない。

ここでいう「既定的単位として認識している」とは、「X 個の Y」が X 個を 1 つのまとまりとする認識が発話時に存在することを示している。「まとまり」である認識とは、「おじいさんが買ってくれた 2 つの消しゴム」や「引き出しの奥にしまってあった 2 つの消しゴム」のようなものでいいが、話者が既定的単位という認識が持っていたとしても、聴者に既定的単位という解釈がなければ文脈的な情報が不足し、不自然に感じるだろう。事前にその場に存在しているものの数量（→事前存在数量）と解釈できれば(12)のように既定的単位としての認識は成立しやすい。そして、連用数量詞は多くの場合事象の量（動作であれば動作量）と解釈される。両者は混在しても矛盾がなければ(13)のように成立する（矛盾する場合とは、事前数量を超える動作量の場合など。「6 個のパン」を「7 個食べる」ことは想定されない）。

(16) 今日は学生が 5 人私の研究室を訪ねてきた。

(17) 今日は 5 人の学生が私の研究室を訪ねてきた。

例えば、(17)は唐突な印象を与えるが、このあとに「まず A 君が…、次に B 君が…」のように 5 人を既定的単位として認識している根拠が明示されれば聴者も了解しやすい。そうでなくとも、わたしたちは「その日訪問した学生」として「5 人」をまとまりとする理由はあると考える。

これは 1.2 で述べた文脈逆成の一例でもある。すなわち連体数量詞文が使われた時点で、既定的単位の認識が聴者になれば、話者は既定的単位として認識しており、既定的単位と考えるべき根拠が（具体的にはわからなくても）存在していると聴者は考える。

2.4 テクスト推意と語彙推意

例えば、(18)を聞いた人は(a)「話者が犬を飼っている」と推定し、(b)「鉄道で通勤している」のだろうと推定する。もちろん、散歩させている犬が隣家の犬である可能性はゼロではないし、自動車や徒歩で通勤している可能性もないわけではない。(a)(b)は発話から得られる文脈想定でもあるが、発話だけではなく、世界知識を参照して引き出していると考えべきものである。演繹的文脈では、文脈のなかに発話が投げ込まれるイメージを持つことが多いかもしれないが、逆に発話から文脈を逆成して豊富な情報を得ることもある。

(18) 毎朝犬を散歩させてから出勤しています。出勤には 1 時間ちょっとかかるので大半は読書をして過ごしています。

(19) 閑さや岩にしみ入る蝉の声

詩歌では少ない言語情報から情景を描き出すことがあるが、これも一種の文脈逆成と見なすことができる。演繹的文脈では、特定の語句から語彙的ネットワークにおいて活性化されることがある。(20)の「ドライブ」から活性化される「ルート」「車」は「その」を冠することも可能であり、「は」でマークすることができる。

(20) 先週道東にドライブに行きました。{ルートは兄のおすすめでした / 車は兄に借りました}。 (加藤.2020)

(21) 昨日駅前で乗用車と軽トラックの衝突事故がありました。{救急車は / 警察は / #テレビ局の取材ヘリは} すぐに現場に到着しました。

同様に(21)では「(交通) 事故」から「救急車」や「警察」は連想され、活性化されるが、「取材ヘリ」の活性度は低い。推意は命題形式を想定するので「救急車が現場に来る」といった形式で考えることになる。「(X が Y を)取る」といった語彙でも「Y が X の管理下に置かれる」といった推意を想定することはできる。

3. まとめ

従来の日本語文法研究の多くは語用論的な知見・発想・視点・問題意識を踏まえて進められてきている。グローバルな語用論の成果を体系的に利用し、発信していく上では、理解を深め、文法・統語論と語用論の差異を踏まえた統語語用論という境界領域を想定することができる。そこから文法テーマや語彙研究、テキスト・談話研究へと広げられる。

参考文献

- 加藤重広(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
加藤重広(2006) 「日本語における数量詞遊離と動作量の意味的關係」加藤・吉田編『言語研究の射程：湯川恭敏教授記念論文集』 ひつじ書房, 23-42
加藤重広(2009a) 「動的文脈論再考」『北海道大学大学院文学研究科紀要』 128, 195-223
加藤重広(2009b) 「語用論から認知言語学を見る」『JCLA Proceedings』 9, 535-550
加藤重広(2010) 「日本語の連体修飾表現の類型と特性」上野善道編『日本語研究の12章』 明治書院 151-64
加藤重広(2011) 「世界知識と解釈的文脈の理論」『北海道大学大学院文学研究科紀要』 134, 69-96
加藤重広(2016) 「統語語用論」加藤・滝浦編『語用論研究法ガイドブック』 ひつじ書房, 159-185
加藤重広(2017a) 「日本語の構文推意」早瀬・天野(編)『構文と意味の拮抗』 ころしお出版, 119-140
加藤重広(2017b) 「文脈の科学としての語用論：演繹的文脈と線条性」『語用論研究』 18, 78-101
加藤重広(2020) 「心理的文脈と前提をめぐる動的心理語用論の構想」田中廣明ほか編『動語用論研究の構築に向けて2』 開拓社, 240-264
寺村秀夫(1993) 「連体修飾のシンタクスと意味ーその1〜4」『寺村秀夫論文集Ⅰ(日本文法編)』 157-320, ころしお出版
Ariel, Mira. (2008) *Pragmatics and Grammar*, Cambridge: CUP
Ariel, Mira. (2010) *Defining Pragmatics*, Cambridge: CUP
Austin John L.(1956) Ifs and cans, *Proceedings of the British Academy* 42, 109-132.
Austin, J.L.(1962 1975²) *How to do things with words*, Oxford: OUP
Bach, Kent (1999) The semantics-pragmatics distinction: what it is and why it matters, Turner (ed.) *The semantics-pragmatics interface from different points of view*, New York: Elsevier Science, 65-84
Bach, Kent (2006) The top 10 misconceptions about implicature, Birner, Betty J. & Gregory Ward (eds) *Drawing the Boundaries of Meaning*, Amsterdam: John Benjamins, 21-30
Carnap, Rudolf (1942) *Introduction to Semantics*, Cambridge: Harvard University Press
Gazdar, Gerald. 1979. *Pragmatics : implicature, presupposition and logical form*, New York: Academic Press
Geis, M.L. and A. Zwicky (1971) On invited inferences, *Linguistic Inquiry*, 2, 561-566.
Huang, Yan (2006, 2015²) *Pragmatics*, Oxford: OUP
Langacker, W. Ronald (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: OUP
Levinson 1983, *Pragmatics*, Cambridge: CUP
Lyons, John (1987) Semantics, Lyons(ed.) *New horizons in linguistics* 2, London: Penguin, 152-178
Morris, Charles W. (1938) *Foundations of the Theory of Signs*, Chicago: Univ. of Chicago Press
Morris, Charles W. (1955) *Signs, Language and Behavior*, New York : Braziller
Nemo, François (1999) The pragmatics of signs, the semantics of relevance and semantics-pragmatics interface, Turner (ed.) *The semantics-pragmatics interface from different points of view*, New York: Elsevier Science, 343-417
Stalnaker, Robert (1972) Pragmatics, Davidson, D. & Herman, G.(eds) *Semantics of Natural Language*, Dordrecht: Reidel 380-397
Searle, John R. (1969) *Speech acts : an essay in the philosophy of language*, Cambridge: CUP
Szabó, Zoltán Gendler (2005) Introduction, Szabó(ed.) *Semantics versus Pragmatics*, Oxford: OUP, 1-14

行為指示表現の変化が起こるところ

—歴史語用論の視座を生かして—

もり ゆう た
森 勇 太 (関西大学)

moriyuta@kansai-u.ac.jp

1 はじめに

発表者はこれまで、依頼・命令など、聞き手に対して何らかの行為の実行を求める「行為指示表現」を研究してきた。行為指示表現の歴史的研究は、以前は「依頼表現」「命令表現」の研究として行われており、「待遇表現」研究の一部として行われることが多かった。しかし、発話行為という「歴史語用論」的な視座を持つことにより、対人コミュニケーションの研究とも位置づけられ、敬語・待遇表現研究に新たな展開をもたらしているといえる。

本発表では、「行為指示表現の変化が起こるところ」の一事例として、「一てくれる」「一てくださる」などの受益表現を用いた行為指示表現について、これらがどのように用いられるようになったのかについて考えたい。

2 行為指示表現の歴史

古代日本語の行為指示表現には、①「一む」、②「一むや」「一てむや」「一なむや」、③「やは一ぬ」、④「一べし」、⑤「命令形」があるとされる(川上 2005, 小田 2015 等)。一方、現代語はそれよりも多く、例えば、高木(2009)では17種類(具体的な形式は各種類に複数あり)が挙げられている。新しく生まれた表現の多くが室町時代以降に成立していて¹、行為指示表現の多様化は(広義)近代語の一つの特徴といえる。

大きく変化した部分として、述部の末尾形式が挙げられる。古代語の行為指示では、命令形が用いられる例が圧倒的に多いが、現代では、命令形命令相当の新形式(「一て」「一な」等)が形成されている。疑問や願望などを用いた間接的形式が用いられることもあり、命令形の使用頻度も低くなっている。また、運用上も、古代語の行為指示では、聞き手に応じた敬語によって対人配慮が果たされる。しかし、現代語の行為指示では、上位者への行為指示には聞き手利益の場合でも受益表現が必須であり、敬語以外の要素の運用も重要となっている。

3 受益表現はどのように取り入れられたのか

3.1 受益表現に着目した行為指示表現の歴史

受益表現は中世前期から見られ(岡崎 1971)、早い段階で日本語の行為指示表現の中に組み込まれるようになったといえる。それでは、受益表現はどのようにして用いられるようになったのだろうか。

1) 主な行為指示表現の初出時期を挙げると以下の通りである。

- (i) a 中世前期 受益表現・命令形「一してくれ」
b 中世後期 受益表現・願望要求形「一してもらいたい」、受益表現・疑問形「一してくれるか」「一してくれないか」
c 近世 連用形命令「し」、ナ形命令「しな」、願望要求形「してほしい」、假定「したらいい」、評価「しなくてははいけない」

行為指示における受益表現の歴史について、発表者は森（2010, 2016）で調査を行っている。森（2010, 2016）では、敬語を用いた行為指示表現について、受益表現を含んだ「受益型」（「一てください」等）と受益表現を含まない「直接型」（「一なさい」等）の2つに分け、それらが「依頼」「勧め」「命令指示」「聞き手利益命令」という発話行為の中でどのように用いられるかということ調査した。中世末期の言語を反映しているとされる『大蔵虎明本狂言』、および近世期の資料では、上位者への話し手利益の行為指示（「依頼」）で、受益型と直接型がともに用いられていた。しかし、明治期以降、「依頼」で直接型が用いられないようになり、受益型が用いられる。現代語の行為指示では、上位者に対してであれば、聞き手利益（「勧め」）であっても、受益表現が必要である。

このように日本語の行為指示表現の中では、受益型がその使用範囲を広げてきたといえる。しかし、中世後期・近世において、受益型と直接型は共に「依頼」で用いられているが、どのような使い分けがあるのかについては考察することができていなかった。また、通時的対照を優先したために敬語形のみを対象としていて、非敬語形も含めた全体像を明らかにすることはできていなかった。『大蔵虎明本狂言』は、受益型行為指示表現の用例が豊富に見られるテキストである。これを詳細に観察することによって、受益表現が行為指示表現の中でどのように運用されてきたかという歴史を考えることができる。

3.2 調査の概要

本発表では、『大蔵虎明本狂言』に見られる行為指示表現について、特に受益型の表現がどのように用いられているかに着目して考察する。

『大蔵虎明本狂言』は1642年書写であるが、先行研究等では、室町時代末期の言語を反映するものとされている。狂言は多様な人物が登場することが特徴で、また台詞によって話が展開されるため、待遇表現の研究に適しており、これまでも山崎（1963）をはじめ、多くの研究がなされてきた。また、行為指示表現・命令形の研究としても米田（2013）、北崎（2015）があり、本発表にとって重要な指摘がある。

『大蔵虎明本狂言』において、受益型行為指示表現はほとんどが命令形で用いられ疑問の形を取ることは少ないため、今回は述語末尾が命令形になっているもののみを抽出した²⁾。

用法の分類について、本発表では「話し手利益（非聞き手利益）」「聞き手利益」「公の利益」「第三者利益」「攻撃的命令」を分けた。受益型行為指示表現の本務は「話し手利益」であり、以下の考察では、全体の用例数と「話し手利益（非聞き手利益）」の状況について詳しく述べる。なお、「公の利益³⁾」は、主従関係の支配者から非支配者に対して業務として実行させる行為指示である。主

2) 『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ狂言』について、キーを活用形（小分類）「命令形」とし、本文種別「会話」のみを採用した。ただし、聞き手が特定できない例、当時文語の「候」が用いられた例、「おる」を用いて下位待遇として用いている例、引用されている会話の中に出現している例、命令形であっても話し手と聞き手の両者が同じ行動をとるもので実質的に勧誘として機能している例などを除いた。

3) 公の利益となる行為指示を区分するという手順は、牧野（2008）を参考にした。牧野（2008）は現代大阪方言の行為指示を記述する中で、「（災害現場で）あそこに人がいる。早く行け。」というような「公の利益」とでもいうべきもの（同：58）があることから、聞き手利益命令の対極として「非聞き手利益命令」を立て、「公の利益」の例を「非聞き手利益命令」に含めている。狂言には、冒頭で主人が太郎冠者に、家の仕事を言いつけるという場面が多く出てくることから、ここには慣用的な行為指示表現の運用がある可能性があると考え、「公の利益」の指示を「話し手利益」と別立てにした。しかし、これを区分しても、話し手と聞き手のどちらかに利益があると想定しにくい例が少数あり、本発表では、これらの利益のありかが判断しにくい例を「話し手利益」に含めて計量している。

に主人から冠者への、家の仕事の行為指示を分類した。「第三者利益」は話し手・聞き手以外の第三者に利益があるものである。また、「攻撃的命令」は、聞き手に対する対人配慮の意図が認められないもので、けんかの中で発せられた行為指示等が含まれる。

3.3 話し手・聞き手の関係

表 1 によって、話し手・聞き手の上下関係について概観すると、話し手よりも聞き手が上位のときに受益型が用いられることが多い。

表 1 話し手・聞き手の上下関係と受益率

	総数		話し手利益	
	受益型 / 総数	受益率	受益型 / 総数	受益率
話し手<聞き手	95 / 275	(34.5%)	92 / 170	(54.1%)
話し手=聞き手	106 / 687	(15.4%)	103 / 380	(27.1%)
話し手>聞き手	49 / 713	(6.9%)	41 / 220	(18.6%)

狂言では、主人（大名・果報者）と太郎冠者とのやりとりが頻出するが、この関係においては、主人からの行為指示でも、太郎冠者からの行為指示でも受益型は用いられない。話し手利益に限った用例数でいうと、主人からの行為指示では 68 例中 5 例（7.4%）、太郎冠者からの行為指示も 19 例中 5 例（26.3%）であった⁴。

- (1) a [太郎冠者] 殊によどの道は、用心がわるふござる程に、某はゑまいるまひ、誰ぞ余の者をやとふてやらせられひ (虎明本狂言、空腕：上、585-586)
- b [伯父] され共しづまるもんが有 [太郎冠者] それをおしへてくだされひ (虎明本狂言、止動方角：上、541)
- (2) a [太郎冠者] そうじて物のなりあがると申。其物がたりをいたひた事御存にて候か [主人] いふてきかせひ (虎明本狂言、成上り：上、530)
- b [大名は歌が読めない] [大名] いや某は、五日や十日ならふたぶんではなるまひ、なんじいふてくれひ (虎明本狂言、萩大名：上、314)

3.4 動作の性質

表 2 には、話し手利益の行為指示において、話し手・聞き手の上下関係を分類したうえで、受益率の高い述語と低い述語を示した。上位者に受益型を用いているものを見てみると、「貸す」、「教える」のように、上位者から下賜されるもの、およびそれに準じるものが挙げられる。上位者への「助ける」はすべて「命を助けてほしい」と懇願するものである。

- (3) a [教え手に袷を借りる] [智→教え手] いやこなたにかへのなひ事はござるまひ、ふるうてもくるしうござらぬ程にかしてくだされひ (虎明本狂言、引敷智：上、364)
- b [盗人のふりをした主人が太郎冠者を襲う] [太郎冠者] なふかなしや。たすけておくりやれ (虎明本狂言、杭か人か：上、593)

4) 北崎 (2015) でも、(ii)のように言及されており、全体的な傾向としては支持できる。

(ii) 下位から上位への要求で、主従関係にない場合にも「(さ) せらる」が用いられることを 3.1.5 で述べたが、同様の条件下では、むしろ「テ形+受給動詞」の方が用いられやすく、「普通語+下されい」の他に「尊敬語+下されい」や「(さ) せられて下されい」も用いられる。 (北崎 2015：225)

表 2 受益率の高い述語と低い述語（数字は 受益型 / 全用例，授受動詞は除く）

受益率	話し手<聞き手	話し手=聞き手／話し手>聞き手
70%～	貸す(5/5), (良いように) 為る(3/3), 仰せ付けられる(6/7), 聞く(5/6), 教える(4/5), 助ける(9/12)	教える(5/5), (名を) 付ける(3/3), 居る(3/3), 同道する(3/3)
70～ 30%	措く(2/3), 堪える(2/5), 御座る(3/9), 退く(1/3)	こしらえる(4/6), 堪える(2/3), 貸す(3/5), 措く(3/7), 持つ(7/17), 戻る(4/11), 絵取る(1/3)
～30%	仰せられる(2/10), 遣る(2/10), 言う(1/5), 待つ(1/6), (御免) 有る(0/6), (御来臨) 為される(0/3), 買う(0/3)	往ぬ(2/7), 来る(2/12), 言う(5/34), 見る(1/7), 渡す(授受)(1/7), 御座る(2/16), 語る(1/10), 遣す(1/13), 仰せられる(1/16), 行く(1/22), 見せる(0/26), 待つ(0/18), 聞かせる(0/18), おじゃる(0/16), 遣せる(0/13), 渡す(来る)(0/13), (御免) 有る(0/12), 仰る(0/12), 申す(0/10), 通る(0/9), 聞く(0/7), おりやる(0/6), 解く(0/6), 退く(0/6), 読む(0/6), 返す(0/6), 食う(0/5), 遊ぶ(0/5), 立つ(0/5), 為される(0/4), 帰る(0/4), 取る(0/4), 出る(0/4), 召す(0/4), 返る(0/4), 失せる(0/3), 出す(0/3)

受益率の低い述語を見ると、「言う」意味の述語が多いことに気づく。「仰せつけられる」のみ受益率が高いが、この多くは、仲裁者に対して自分の主張を伝え、良いように取り計らってもらう際に用いているものである。同等・目下に対しても受益率は低い。

- (4) a 【目代】 やいやい汝は何事を此の市のはじめにいふぞ【男】 まつようきかせられひ、
[※中略，自分が先に場所を取ったのに割り込まれたと説明する] あそこな女が、わたくしがうしろへ参つて、けつく私にたてと申を、たつまひと申せは、あのことに申程に、有様に仰付られてくだされひ (虎明本狂言，連尺：下，97)
- b 【妻→仲裁人】 わらはがよめいりをした時，十二ひとえをきてまいりたるを，あのおとこが，酒手のしちにしはてて御ざる，それをかへせいなふと仰られひ (虎明本狂言，吃り：下，33)

そのほか、「待つ」、移動「(御来臨) 為される」「出る」といった発話場で動作が完結するような行為指示には受益型が使われない。

- (5) a 【舅】 そのていにて算用はなるまひ，かへらせられひ。[※中略] [そら賀一] いやまづおまちやれ (虎明本狂言，賽の目：上，399)
- b 【大黒】 某は三面の大こくにてあるが，なんぢら毎年それがしをしんじて，年籠をするほどに，福をあたようと思ふて是まで出であるよ【男】 それはかたじけなふ御ざる，さあらは是へ御来臨なされい (虎明本狂言，大国連歌：上，17)

目下に対して受益型が使われている例を見る。北崎（2015）では“主従関係において「てくれ」が用いられるのは，動詞命令形単独で命令を行う場合よりも，「無理なお願い」をする場合のようである（同：226）”と述べられている。例えば，(6)は，夫が妻に内緒で田舎の女に会うため，妻に「座禅をする」と言って一晩の暇をもらい，その後太郎冠者に座禅の代理を依頼するものである。

- (6) 【夫】 ざぜんのすがたがなくは身共をただおくまひ程に，なんぢざぜんをしてくれい (虎明本狂言，花子：下，60)

主従関係以外で，目下，あるいは待遇の度合いが高くないときに使われる受益型も注意される。「持つ」の受益型が7例あるが，これらは(7a)のように，すべて出かける道中で会った直接の主従関係に当たらない人物に刀を持つように依頼するものであり，「無理なお願い」に通じる。(7b)は，狐は伯蔵主（僧）に化けて，狐を釣るという男のところを訪れ，道具を捨てさせようとするも

のであるが、男の反応からは、その依頼内容が談話の中で自然と実行されることのない内容であったと考えられる。

- (7) a [大名] 身共も人をあまたもつたれども、おりふし方々へやつてうちに人がなひによつて、自身太刀をもつた、これをもつてくれさしめ (虎明本狂言、昆布売：上、304)
- b [伯蔵主] さあらはぐそうが見るまへで、きつねをつる道具をすててくれさしめ [男] 是はいかな事を仰らるる、いまのほどおそろしき御物がたりを承り、かやうに某がためを思しめして仰らるるに、すつるまでもござなひ (虎明本狂言、釣狐：下、420)

このように、『大蔵虎明本狂言』に見られる受益型は、下賜、懇願、「無理なお願い」、発話場で即時完結せず、そのままでは実行されない動作に使われるという特徴がある。

4 通時的変化

4.1 中世前期

鎌倉時代の受益型行為指示表現の例を見ると、懇願の例が見られる。また、神仏への祈願の例が多く、これも懇願と通ずるものと考えられる。

- (8) a [藤原敏行は紀友則の夢に現れる] [敏行] 「[※中略] その経を書かずして遂に失せにし罪によりて、たとふべき方もなき苦を受けてなんあるを、もし哀れと思ひ給はば、その紙尋ね取りて、三井寺にそれがしといふ僧にあつらへて書き供養せさせて給へ」 (宇治拾遺物語、巻8-4：264 [1242])

- b [那須与一] 「南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現、宇都宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇のまんなか射させてたばせ給へ。」 (平家物語、巻11：②359 [13C])

目下に対して使う例として(9)がある。天皇の地位から降りたい天皇が、臣下の基経に政治を一任しようとして使うものであり、「無理なお願い」として捉えられる⁵。

- (9) サテ寛平 [※宇多天皇] ハ位ニツカセオハシマシケルハジメヨリ、「我身ハ無下ニ聖主ノ器量ニアラズ」トテ、「トクオリナン」トツネニ昭宣公 [※基経] ニオホセアハセケルヲ、「イカデカサル事候ン」トノミ申サレケレバ、「サラバー向ニ世ノマツリコトヲシテタベ」トウチマカセテオハシマシケル程ニ、 (愚管抄：154 [1220])

中世後期も、軍記物語に出てくることが多いことに留意すべきではあるが、神仏への祈願の例が多い。懇願、および、近くない関係での調整としての使用という語用論的意図は共通する。

4.2 近世後期

近世後期洒落本で受益率が低い例について見てみる(森 近刊)。受益率の低い動作としては、「止す」、「措く」、「待つ」、「聞かせる」、「(話し手のほうを) 向く」などが挙げられる。

- (10) a [谷] 水いらずに、おれがつごうか [綱] よしなんし。給んせん (甲斐新話：⑥302 [1775])
- b [客・一枝は帰ろうとする] [新造・禿] おまちなんし、一枝さん (傾城買杓子木：②22 [1804])

「言う」は洒落本でもよく出てくる動作であるが、話し手に対して言うことを求める例は16例中

5) 「一てたべ」の例が確認できた資料は『平治物語』『愚管抄』『宇治拾遺物語』『平家物語』であった。13例中、懇願と解釈できる例が5例、神仏への祈願が4例、無理なお願いの例が1例見られた。

6 例が受益型であったのに対し、第三者への伝言を求める例は 24 例中 22 例が受益型であった。

(11) a [三沢] サアいひなんせんと、つめりいすよ [金公] アアいてへいてへ。いおふいおふ [三沢] サアいひなんし [金公] 外でもねへ。美しい所が、気に入た

(甲駅新話：⑥305 [1775])

b [喜の] [※中略] いいかげんにしてけへりねへ。とんだねむそうなめだ。みつのへさんによくいつてくんねへ。[新造] おさらばへ。(通言総籙：385 [1787])

『大蔵虎明本狂言』でも見られたように、発話場で即時完結する動作で受益型が使われにくいという傾向は、近世後期においても同様の状況であると考えられる。

5 まとめ

日本語の行為指示表現の歴史において、古代語から現代語への変化の趨勢として、述部の形式の多様化、使用する間接的要素の多様化が挙げられる [2 節]。その中で、比較的早く取り入れられた受益表現について、中世末期『大蔵虎明本狂言』を見たところ、主人—太郎冠者などといった主従関係では受益型は用いられにくい [3.3 節]。動作の内容としては、上位者への懇願や無理なお願いで受益型が使われやすく、発話場で即時完結するような動作には受益型が用いられにくい [3.4 節]。

このことを総合して考えると、中世後期の受益型は聞き手と親しい関係にないとき、また、聞き手がそのままの状態では依頼を受け入れないだろうと考えるときに用いられる傾向にある。このような行為指示表現の変化が起こるところが一般性のあるものなのかを考えることで、歴史語用論としての行為指示表現研究が進展するものと期待したい。

資料

『愚管抄』『通言総籙』（『日本古典文学大系』岩波書店）、『宇治拾遺物語』（『新編日本古典文学全集』小学館）、『平家物語』（『新日本古典文学大系』岩波書店）、『大蔵虎明本狂言』（清文堂出版）、『甲駅新話』『傾城買杓子木』（『洒落本大成』中央公論社）、読みやすさのため表記を改めたところがある。

日本語歴史コーパス 国立国語研究所 (2021)『日本語歴史コーパス』（バージョン 2021.3, 中納言バージョン 2.5.2）<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/> (2021 年 5 月 30 日確認)

参考文献

- 岡崎正継 (1971)「中世の敬語—受益敬語について—」『国学院雑誌』72-11, pp.253-263, 国学院大学
小田勝 (2015)『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院
川上徳明 (2005)『命令・勧誘表現の体系的研究』おうふう
北崎勇帆 (2015)「虎明本狂言集に見られる命令・要求表現」『日本語学論集』11, pp.239-217, 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
高木千恵 (2009)「命令表現」国立国語研究所全国方言調査委員会(編)『方言調査ガイドブック』3, pp.105-129, 国立国語研究所
牧野由紀子 (2008)「大阪方言における命令形の使用範囲—セエ・シ・シテをめぐる—」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.55-74, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
森勇太 (2010)「行為指示表現の歴史的変遷—尊敬語と受益表現の相互関係の観点から—」『日本語の研究』6-2, pp.78-92, 日本語学会
森勇太 (2016)『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房
森勇太 (近刊)「近世後期洒落本の「受益型」行為指示表現—地域差と現代語との差異—」近藤泰弘・澤田淳(編)『敬語の文法と語用論』開拓社
山崎久之 (1963)『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
米田達郎 (2013)「大蔵流狂言虎明本の要求・依頼の表現について—(サ)シメを中心に—」『近代語研究』17, pp.79-97, 武蔵野書院
付記 本発表は JSPS 科研費 21K00549 の助成を受けたものである。

日本語学会2021年度秋季大会シンポジウム：語用論と日本語研究

近現代日本語における授受表現と敬語の語用論

—聞き手意識による変容を捉える—¹

滝浦真人 (放送大学)

0. 語用論的に見るということ

0.1 語用論とは？

- 発話の意味を、話し手・書き手(=発話者)の「意図」と聞き手・読み手(=受信者)の「解釈」との連関で捉える(Yule 1996)
=「発話の意味」ではなく、「発話者の意味」「受信者の意味」において捉える
(グライスは「発話者の意味」まで、ミレニウム以降のポストモダンの立場は「受信者の意味」を重視)
⇒ 発信者／受信者どちらが焦点でも、目的や結果との連関において捉えようとする「目的合理的」
(＜M.Weber)な側面

0.2 本発表の対象と観点

- 本発表の対象
おおむね明治以降現在に至る近現代日本語における授受表現と敬語の使用の有様(変容)
- 語用論的観点
その変遷をただ記述するのではなく、なぜそのような変化が生じているのか？ それはまた、言語使用のなにをどのように変化させているものと解することができるのか？
⇒ 変化の動因を推定しつつ、授受表現や敬語の使用法の変化が体现しているものを考えることができる
i.e., 言語変化・言語現象の「目的合理的」な捉え方があることが語用論的アプローチ

1. 本発表で考えたいこと

1.1 「ベネファクティブ」の変遷

- 「ベネファクティブ」=授受動詞の補助動詞用法(山田 2004)
- Q. 近現代においてベネファクティブの消長が激しいのはなぜか？
(幕末・)明治以降の150年間にベネファクティブに生じた主要な変化
- ヤル系における第2敬語形「テサシアゲル」の登場
- モラウ系敬語形における「テイタダク」の許可使役付「サセテイタダク」の登場
- ヤル系敬語形における「テサシアゲル」の衰退、「テアゲル」の変質
- クレル系敬語形「(サセ)テクダサル」の勢力減退
- モラウ系敬語形「(サセ)テイタダク」の“一人勝ち”状況

1.2 敬語の変遷

- 敬語の「5分類」(『指針』文化審議会 2007)
- Q. なぜ5分類か？ 増えた類型はどんな類型か？
- 「謙譲語」から分離独立した「丁寧語」
- 「丁寧語」から分離独立した「美化語」

¹ 末尾にある【本発表の元になっている論文等】をご参照いただきますと、本発表の内容を文章の形でお読みいただくことができます。

- 旧来の3類型「尊敬語／謙讓語／丁寧語」対 新しい2類型「丁寧語／美化語」という括り方が可能か？ 可能だとしたらそれは何における対立と言うべきか？

1.3 敬意漸減(逡減・低減)

○敬意漸減(江湖山 1941)

敬語・呼称などの敬語的表現が宿命的に被る敬意のすり減りとそれによる言語形式の代替わり現象

- 敬語や敬語的呼称における敬意的なニュアンスは“+α”(過剰性)として表される

e.g., “食べる”ことの敬意漸減過程とその補償としての「(謙讓語化→)美化語化」:

「食ふ」>「食ぶ>食ぶる>食べる」>「いただく」

(命あるものを殺して食べるという生々しさにおいて敬意漸減が生じやすい?)

- 本動詞／ベネファクティブ「(テ)イタダク」に見る敬意漸減

(1) そのため、肉や内臓類は新鮮で少しあぶっただけのレア状でもおいしくいただける。(BCCWJ: 藤津毅『あんグラ・now! オヤジの神ワザ・美女156』学習研究社、2003) [謙讓語～美化語的]

(2) これからの鍋なんかには本当に合う野菜なので、ぜひエサをやって、美味しくいただいてください。

(NWJC: ブログ <<http://webmasa.blog83.fc2.com/blog-entry-300.html>>) [美化語的]

(3) 日数が経過しても腫れ等に変化が無い、あるいはお子様が痛みを何度も訴えられるといったような場合には、再度担当の先生に診ていただいてくださいね。(NWJC: 知恵袋 <<https://www2.ha-channel-88.com/soudann/soudann-00021177.html>> 医師によるアドバイス) [謙讓語的]

(4) 自分で塗るのが難しい人は是非友達や彼女に塗っていただいてください。(NWJC: ブログ <<http://goruche.seesaa.net/category/4451883-1.html>> ジャン・ポール・ゴルチエのメンズ用ネイルの紹介文) [美化語的]

(5) 母の味をぜひ息子さんに味わっていただいてください。(NWJC: 知恵袋 <<https://okwave.jp/qa/q3788356.html>>) [美化語的]

○敬意漸減の具体的な動因や速さなどについての考察はあったか？

Q. ヤル系第2敬語形として登場した「テサシアゲル」はなぜ短命に終わったのか？

⚠️また、その敬意漸減過程は齊一か？という問題は別に調査・考察が必要

Q. 「多くのお客様がご来場いただきまして」式の(破格のガ格まで付いた)「(テ)イタダク」はなぜ選好され、何も間違っていないはずの「(テ)クダサル」はなぜ忌避されているのか？

2. ベネファクティブの何がどうシフトしてきたか？

2.1 薄幸のベネファクティブ「テサシアゲル」

○なぜ2つの敬語形が？

- 第1敬語形「テアゲル」が敬意漸減したため、それを補償すべく第2敬語形「テサシアゲル」が19世紀後半に登場

(6) もし大変お困りなら、わたしの力で出来るだけの事は差し上げたいと思ひます。(宮嶋資夫「金」1926、『日国』第2版)

- ベネファクティブとしての恩恵移動の方向がヤル系のみ遠心的

⇒ “与える恩”を丁寧に(上から目線にならないように)表現することの難しさ

(7) よく眠れるように薬を加減して差しあげましょう。(青空文庫: 徳田秋声「仮装人物」1938)

- 現在の語感: 発表者の内省によれば、ベネファクティブの敬意漸減は本動詞よりも進行しており、対面する相手に使えるとしたら相手が目下の場合(それでも嫌味っぽい)や文字どおり嫌味としての用法で、比較的使いやすいのは話し相手から第三者への恩恵移動ぐらい?

(8) 推理作家相手に、ここまで手とり足とり教えて差し上げなければならないのかしら。(BCCWJ: 吉村達也「ベストセラー殺人事件」1998)

(9) (上司や先生などに) ??では、手に入り次第、{送っ／お送りし}て差し上げます。(作例)

〔対二人称用法〕

(cf.「お送りします／お送りいたします／送らせていただきます／お送りさせていただきます」)

(10) 呆然としながらも夫人はフェリックスに、「どうかそのお方をしっかり愛してさしあげてね」と涙ながらにいう。(NWJC: 野崎歓『フランス小説の扉』白水社、2001)〔対三人称用法〕

●コーパス調査: 「テサシアゲル」の対二人称用法と対三人称用法で勢力のシフトは斉一か？

「青空文庫」(Aコーパス)と「BCCWJ」(Bコーパス)で比較

恩恵の受け手の人称による出現頻度の差(椎名・滝浦 2021)

受け手	Aコーパス	Bコーパス
二人称	51▲	54▼
三人称	62▼	154▲

(誤差1%水準での有意差; ▲ 多い、▼少ない)

i.e., 数十年の間で、対二人称用法が相対的に減少し、対三人称用法が相対的に増加した

= 相手に対して面と向かって恩恵授与を表現することへの躊躇が大きくなっている

(対面していない相手への恩恵授与ならそれほど抵抗がない)

⇒ 「聞き手意識」の増大による変化、と解釈

○変容した「テアゲル」: 21世紀にかけて勢力拡大？

●コーパス調査: BCCWJ(Bコーパス)内で年代を分けて出現頻度を調査 (椎名・滝浦 2021)

	'70～'80年代	'90～'00年代
テヤル	1449▲	11470▼
テアゲル	352▼	7863▲
テサシアゲル	15	94

(誤差1%水準での有意差; ▲ 多い、▼少ない)

i.e., 「テアゲル」だけが相対的に増加している(どうの昔に敬意漸減したはずでは？！)

= 対上位者用法はすでに不可であるとの認定を前提とするなら、非対上位者用法の勢力拡大によるもの

⇒ 対下位者のみならず対モノ用法もよく耳にするように

i.e., 等位者・下位者やモノに対して“やさしく”接するニュアンスにおいて選好される表現として復活した「テアゲル」？

(11) コーパスからその単語間の関係を利用してあの単語クラスをうまく形成してあげる方法もあるんですが(CSJ[Cコーパス])

2.2 「サセテイタダク」の“一人勝ち”

●コーパス調査: 求心的ベネファクティブ2系列の敬語形／非敬語形の頻度調査 (椎名 2021)

	Aコーパス	Bコーパス
サセテクレル	1062▼	3328▲
サセテクダサル	585▲	874▼
サセテモラウ	940	2597
サセテイタダク	535▼	2190▲

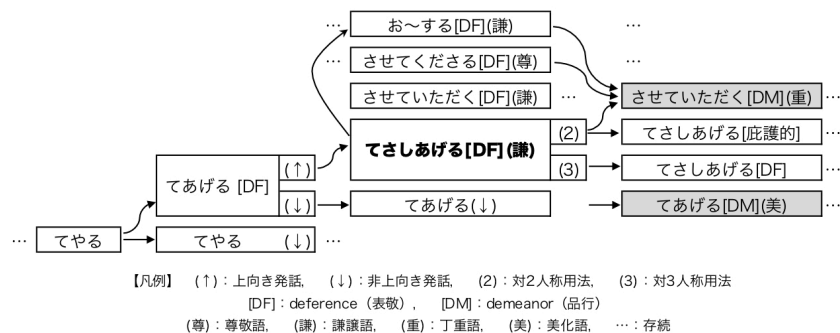
(誤差1%水準での有意差; ▲ 多い、▼少ない)

i.e., 「サセテクレル」と「サセテイタダク」が相対的に増加、「サセテクダサル」が減少しているとの結果
 = クレル系からモラウ系への語彙的なシフトではなく、非敬語形と敬語形とでシフトが異なるとの結果で、非敬語形ではクレル系が増え、敬語形ではモラウ系が増えている
 ⇒ 「サセテイタダク」現象はポライトネス現象だという認識が必要
 i.e., 人びとが丁寧・上品な物言いをしたいと思う場合に生じている現象ということ

Q. なぜクダサルではなくイタダク？

A. 答えは主語の相違で、与え手(他者)が主語のクダサルは主語で相手に“触れて”しまうが、受け手(自己)が主語のイタダクは相手に“触れず”に恩恵を表現できることが、敬避的ポライトネスとして選好されるものと考察

★サセテイタダク“一人勝ち”の図 (椎名・滝浦 2021)



3. 敬語の何がどうシフトしてきたか？

3.1 「謙譲語」と「丁寧語」の境界

○〈向かう先〉問題 (『指針』の検討)

「謙譲語」: 自分(側)の行為などが〈向かう先〉の人物を立てる

「丁寧語」: 行為などをする自分(側)がへりくだる[ことによって対話の(相手)を立てる]

⚠ 〈向かう先〉について発表者は、「行為など」よりも「敬意」の対象者と考えたい

⚠ 『指針』は「へりくだる」ではなく「丁寧に述べる」との表現

⚠ 発表者は、『指針』にある[]内を丁寧語の“意味”としてではなく、あくまで間接的な“効果”と見て切り離すことを提案

⇒ 〈向かう先〉がある「謙譲語」対 自分(側)がへりくだるだけの「丁寧語」との捉え方に

○二格問題

謙譲語「伺う」と丁寧語「参る」の比較検討

●コーパス調査: 「...に伺う」と「...に参る」をBCCWJで比較 (滝浦 印刷中)

	に伺う	に参る
寺社・墓 等に行く	2	50
尊重すべき人のところへ行く	48	5
相手(受け手)のところへ行く	22	3
関わりのある場所等へ行く・来る	0	17
人に尋ねる	82	—

i.e., 統計処理できないほどの明瞭な差によって、

お宮・お墓参り的な「場所」に「参る」対 “人”(のところ)に「伺う」

⚠ 人のところへ行く「参る」はかなり“大時代的・演劇的”

- (12) 心に『秘密』を抱えた貴方のもとに参ります。(BCCWJ:「ドールズ・パーティー」の宣伝文)
 ⇒ 「に伺う」は〈向かう先〉を立てる用法がほぼすべて、
 「に参る」は場所を対象とする古典的な用法が固定化した一方、人を対象とする用法は空洞化
 = 二格が敬語と関連して機能していれば「謙譲語」、そうでなければ「丁寧語」と言えるのでは？

3.2 旧来の3類型と新しい2類型とは？

○〈相手〉問題と5分類

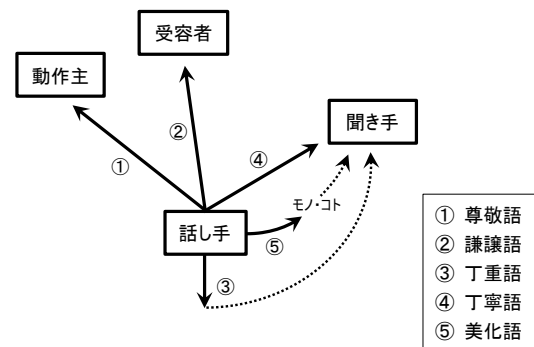
「美化語」: 特定の誰に向けたものでもなく、事物をただ丁寧・上品に言うもの

「丁寧語」: 相手(受け手)に対して丁寧に述べるもの

⇒ 〈向かう先〉としての〈相手〉がある「丁寧語」対 丁寧・上品に言うだけの「美化語」との捉え方に

★敬語5分類とは何だったか？(滝浦 印刷中)

5分類	他者指向性	敬語的機能
尊敬語	強	動作主指向
謙譲語	強	受容者指向
丁寧語	弱	自己呈示的 (動因としての「聞き手意識」)
丁寧語	強	受け手指向
美化語	弱	自己呈示的 (動因としての「聞き手意識」)



旧来の3類型 : 新しい2類型

= 〈向かう先〉のある敬語 : 〈向かう先〉のない敬語

○二格問題ふたたび

- 「(人)が...ていただき」式の表現を誤用と言えるか？(金澤 2007)

(13) 今日だけでですね、全国で16万人の人が、エー、見ていただいたということで、本当に、あの一、嬉しいことでございます。(金澤 (2007): テレビの番組宣伝)

(14) 多くのお客様が快適にご利用いただけるよう、長時間のご利用・荷物を置いての場所取り等はご遠慮願います。(都営新宿線神保町駅ホームベンチ上の張り紙、2021年)

●異分析の解釈

[人ニVテイタダク]

[人ガV]テイタダク ⚠このガ格は〈向かう先〉ではない！(i.e., [人ガVすることを]イタダク)

●ニモ／デモ問題？

(15) どなたにもご利用いただける総合病院です。(JR飯田橋駅ホームの「東京通信病院」広告)

「どなたでも？」の方が自然？と一瞬思ってしまった発表者...

⚠ニは格助詞、デは非助詞(指定の助動詞ダの活用形)

コーパス調査: 「どなた{ニ／デ}も...ご利用イタダク」の出現頻度調査(NWJC)

	単純頻度	ノイズ除去後の推定概数
どなたニモ	126	119
どなたデモ	2034	2024

コーパス調査: 「どなたにも」と「どなたでも」の出現頻度調査(青空文庫)

どなたにも	64
どなたでも	52

⇒ 〈向かう先〉としての二格が忌避されている？！

●丁重語化する「イタダク」

二格を必要としなくなった「イタダク」は「謙讓語」から「丁重語」へと変化している

⇒ 許可使役の許可性や恩恵性が希薄化して二格を必要としなくなった「サセテイタダク」も丁重語と捉えることができる(椎名 2021 の「新・丁重語」)

= 〈向かう先〉のない丁重語が選好されている

4. 敬語(的表現)はどこへ向かっているか？

○ゴフマンの表敬／品行(deference / demeanor)

守るべきもの2つ：他者と自己(→ protect と defend)

その各々を尊重するフェイス・ワーク：deference／demeanor

「品行」とは？：コミュニケーションの構えができたまともな相手であること(Goffman 1967)

⇒ 他者指向的な表敬を表す旧来の敬語3類型 対 自己呈示的な品行を表す新しい敬語2類型

A. 人びとは、他者に触れることなく丁寧・上品な自分を表現することに腐心している

← 非身分社会において、自分の判断で他者の待遇を選択しなければならないことの負担感？

○コミュニケーションの大きな変容

敬語は丁重に遇すべき他者を指向するものだったが、人間関係の不確定性と流動性が大きくなる中で、他者を指向すること自体を躊躇し始めている人びとの姿が見え隠れ？ ベネファクティブも同様、他者に触れることなく恩恵(だけ)を表現することで、丁寧・上品な自己でありたいと思う人びと？

【本発表の元になっている論文等】

椎名美智(2021)『「させていただく」の語用論 ―なぜ使いたくなるのか―』ひつじ書房。

椎名美智・滝浦真人(2021)「薄幸のベネファクティブ『てさしあげる』のストーリー ―敬意漸減と敬意のナルシズム―」田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝 編『動的語用論の構築へ向けて』pp. 204-240, 開拓社。

滝浦真人(2020)「『ポライトネスの原理・原則』と日本語ベネファクティブの敬意漸減」加藤重広・滝浦真人 編『日本語語用論フォーラム3』pp. 75-104, ひつじ書房。

滝浦真人(2021)「『国語に関する世論調査』に見る敬語意識 ―言葉と行為のはざまに見えるもの―」『日本語学』40(2), pp. 48-61, 明治書院。

滝浦真人(印刷中)「なぜいま敬語は『5分類』になったのか？ ―日本人の敬語意識に起こっていること―」近藤泰弘・澤田淳 編『敬語の文法と語用論』開拓社。

【引用文献】

江湖山恒明(1943)『敬語法』三省堂。

金澤裕之(2007)「『〜てくださる』と『〜ていただく』について」『日本語の研究』3(2), pp. 47-53 (金澤裕之(2008)『留学生の日本語は、未来の日本語 ―日本語の変化のダイナミズム―』ひつじ書房 に再録)

文化審議会答申(2007)『敬語の指針』文化庁

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf>

山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』明治書院。

Goffman, I. (1967/1982) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*. Pantheon Books.

(ゴッフマン、アーヴィング、浅野敏夫訳(2002)『儀礼としての相互行為 ―対面行動の社会学―』法政大学出版局)

Yule, G. (1996) *Pragmatics*. (Oxford Introductions to Language Study) Oxford University Press.